

102～この夏は豆腐が熱い！～

高菜わさび

怒り

「夏バテするとは、何だ！豆腐が足りんのだ、豆腐食え！」

木綿豆腐を買ってきたら、味噌汁に入れやすいように、20等分に切ってから、蓋付き容器に水と共に保存しておけ！

「朝食作りの慌ただしい中、そしたらただ味噌汁にダイブさせるだけでいい」

味噌汁

昼食の味噌汁はネギが浮かんでいた。

箸をつけると、豆腐が底から現れた。

「豆腐、いないと思ったでしょ？」

摘まれた豆腐は得意気に言うのだった。

夜道

夜道を歩いていたら、不意に気配を感じたので、足を止めてみたら、一步遅れて。
ペチャリと音がした。

後ろを振り返ると、電柱の影からはみ出た夜でも白い物。

（豆腐だ！）

何で豆腐かはわからない、けれど豆腐に後を付けられている、それだけで私は恐怖を感じた。

「誰か、助けてください！」

フローズン

夏の新商品候補として登場したのは、半透明のフローズンカップに、濃厚なブラウニーの豆乳ソースがけ。

「社長、感想をいただけますか？」

「笑いを狙いに来るのかと思ったけど、予算的にも見た目的にも、きちんとしたもの出てきたので驚いているよ」

「ありがとうございます」

豆腐を二つ並べた。

「どっちの豆腐を食べればいいのでしょうか？」

占い師に聞くと。乳白色の石が先についた鎖で、占い始めた。

「新しい出会いが欲しければ右を、財産を得たいのならば、左を」

私は右の豆腐を選び、その年に結婚した。

もしも、左を選んでいたら...どうなっていたらろう。

おまじない

おまじないを教えてあげる。

「まず豆腐を用意するの、木綿でも絹でもいいんだけど、それに好きな人の名前をフルネームで書いてね」

書いたら、その豆腐を食べましょう。

「そしたらその人と両思い、間違いナシだよ

どれにいたしますか？

車内販売のワゴン車がやってくる。

「お客様、コーヒー、紅茶、木綿豆腐、どれになさいますか？」

「...コーヒーで」

「バカだな、グリーン車で木綿豆腐頼まない奴があるか、木綿豆腐2つで」

「かしこまりました」

今時珍しい、清純派アイドルになれそうな子を見つけました。

「見てください、この白い肌。そして不用意に触れたら、この崩れそうな感じが魅力なんです」

「...豆腐？」

「我が社でも工場見学という物を行いたいのですか？」

「うちは豆腐工場だぞ」

「そんなの見てておもしろいのかね」

様々な意見が飛び交う中、私は密かに用意していた。工場見学した人限定。

『豆腐工場から逃げてきました』グッズを披露する事にした。

寿司大会の決勝、軍艦巻き対決。

「相手は枝幸のウニを握りやがった、マサルは一体何で勝負するつもりだ？」

「おおっと、白いウニ...いや、これは豆腐だ、豆腐の軍艦巻きを出してきた」

(兄さん、俺が軍艦巻きの練習するために、使った豆腐は数知れず、これでこの勝負、勝ちに行きます！)

寝ている人がいる。

ガサ！

窓から豆腐が入ってきた。

そして寝ている人の耳に近づき。

「お前は豆腐が食べたくなる」 そう三回つぶやいた。

次の日。

(俺は何でわざわざ朝から駅が二つも違う、豆腐屋のモーニング食べてるんだろう)

「豆腐かけご飯お待たせしました」

「はい、次読んで」

「戦を仕掛けるために、隣国に特使を派遣しましたが、干ばつで厳しいしはずの隣国は、ずらりと並んだ家臣たちまで、みんな立派な鎧、具足をつけていました。それをした殿様は戦はやめて同盟を選ぶことにしました」

「しかし実際は、その鎧、甲冑ですね、甲冑に使う鹿の皮もなかったそうです、代わりにその部分を高野豆腐で作って、ごまかした物だったみたいですよ」

「豆腐さんですよ、ファンです、握手お願いします」

「あっ、今、プライベートなんだけど...」

といいながらも、握手に応じる豆腐。

(おかしい、帽子とマスクとサングラスつけてるのに、なんで豆腐だってばれたんだろう)

御利益

「このお守りは何ですか？」

「こちらは豆腐になります」

「御利益は？」

「世渡り上手になれる御守りです、都々逸に世の中を上手に生きるにはの例えで豆腐を使ったものがあるので、豆腐は世渡り上手の御守りなんです」

「今の人生生きづらいと感じている人が多いようで、一時期は品切れも起きたほど、大ヒットしてます」

「これが今年の新色です、黒です。これはすごいですよ。なんといっても大豆を使っています、みなさんが知ってる、ゴマ豆腐は大豆を使ってません、でもこれは大豆をきちんと使っています、お値段は198円、198円でどうでしょう！」

テレビの前の視聴者。 「ボーナス出たし、買おうかな」